

[第19回]

# NCGG-RI 研究発表会

National Center for Geriatrics and Gerontology, Research Institute

## 運動器疾患とゲノム研究

運動器疾患研究部 骨細胞機能研究室

渡邊 研 室長

2017年4月11日(火) 16時00分～  
第1研究棟 2階大会議室

一般的に高齢期に特有な疾患は、遺伝素因と環境素因を比べるとより後者に重きがあると考えられ、その発症や進行と生活習慣病との関連が知られるものが多いが、疾患によっては遺伝関与が高いものがあること、また、ゲノム情報による薬効予測や層別化など、注目されているゲノム医療の推進において高齢期の疾患は決して対象外ではないと思われる。しかしながら、ゲノム情報が高速かつ安価に得られるようになった現在でも多型や変異について意義付けされたものの方が少ないのも現実であり、DTCなどによる遺伝情報を用いたリスク診断は未だエビデンスレベルが低い、ひいては“余興”とされるものも少なくない。AIを用いたアノテーション技術も開発される中、地道なウエット実験によるエビデンス取得も非常に重要な鍵を握っている。

高齢者のADLを損なう運動器疾患は、高齢者のQOLならびに介護予防において最重要課題のひとつである。生物製剤を含む治療法の開発・実用が進んでいる骨粗鬆症やリウマチとは異なり、変形性関節症や脊柱管狭窄症は罹患者が多いにもかかわらず、その開発基盤となる分子情報が限られており、それに基づいた治療法は未だほとんどない。遺伝学的手法を用いた解析から、このような関節疾患の関連分子やパスウェイを見出すべく、現在進行中の研究の進捗についてご紹介したい。

座長：小木曾 昇